日本フランス語フランス文学会

2026 年度春季大会

ワークショップ要旨

2026 年 5 月 31 日（日）

文学と教育——作品中の「教育者」像から、教育対象としての文学まで

小倉孝誠（慶應義塾大学名誉教授、コーディネーター）
石橋正孝（立教大学）
畠山達（明治学院大学）

文学と教育はいろいろな点で繋がりが深い。まず、文学作品のなかで、学校や修道院などの教育空間を舞台としてそこで学ぶ子供や若者が描かれたり、制度的な枠組の外部でさまざまな意味で教育者としての役割を果たす人物が登場したりする。文学作品の内部における教育の表象の問題である。次に、時代によって様相は異なるが、作家は作家になる以前に家庭や学校で教育を受け、文学を実践する以前にそれを学ぶという体験をする。文学を読まずして、あるいは学ばずして作家になる者はいないだろう。作家を形成する教育の次元が考察される所以である。

第三に、文学は学校や大学で教えられる。中学・高校では国語の授業があり、大学では文学概論、文学演習などで教員は学生に文学を講じている。たとえば仏文科の科目である「フランス文学史」の場合、どのような視点から、どのような流派、作家、作品を解説するのか。教育の対象としての文学も無視できない。その他にもさまざまな問いかけが可能だろう。

このように文学と教育に関する問題は、文化や制度にまつわる争点とも結びつく。本ワークショップでは、19 世紀の文学場を中心にして、この問題の多様な側面を考察する。小倉がワークショップの趣旨を解説した後、三つの発表が続く。

畠山は、1838 年のコンクール・ジェネラルにおいて表彰された「フランス語演説」の答案を主な考察対象とする。まず同コンクールの内容を概観したうえで、中等教育の基軸を形成していた学習規範、とりわけ古典の位置づけ、論述における構成と修辞学的特徴を探る。未来の作家や読者が共有していた文学的土壌の一端を掘り起こすことで、教育と文学の関係を再考したい。

石橋は、ジュール・ヴェルヌ（1828-1905）の連作〈驚異の旅〉（1866-1919）において、「教育者」がどのような役割を担っているのか、という問いを立て、この観点から重要と思われるいくつかの作品を俎上に上げる。想定読者と重なる「被教育者」から「教育者」の典型たる学者、そして、小説そのものの比喩となる乗り物まで、異なるレヴェルに対応する「教育者」たちの布置を検討したい。

小倉は、19 世紀後半の文学選集や文学史の著作を参照しながら、中等・高等教育において、「フランス文学史」がどのように制度化され、それが文化的、社会的にいかなる意味を有していたかを考察する。そして近年の文学史のあり方に触れながら、21 世紀の新たなフランス文学史の可能性について問いかける。

本ワークショップが、文学と教育の豊かで多面的な関係性について議論するきっかけになれば幸いである。

ジェノサイドと証言——表象不可能性のあとで

久保昭博（関西学院大学）× 谷口亜沙子（明治大学）

20 世紀以降の戦争、強制収容所、ジェノサイドという暴力に由来する極限的な出来事や経験は、数多くの証言文学を生み出し、文学研究のみならず、歴史学なども含む領域横断的な研究の対象となってきた。この証言文学において圧倒的に大きな位置を占めるのが、第二次世界大戦期のナチス収容所、とりわけホロコーストやショアーと呼ばれるユダヤ人ジェノサイドである。「アウシュヴィッツの後に詩を書くことは野蛮である」というアドルノの警句をはじめ、このジェノサイド表象は、しばしば「語りえないもの」や「表象不可能性」といったパラダイムによって規定されてきた。この傾向の極北に位置するのが映画『ショアー』(1985)の監督クロード・ランズマンであり、彼の言論を一つの磁場として、芸術（特にフィクション）を出来事の真性さを損なうものとして禁忌の対象とする一方、表象不可能な出来事を唯一伝達可能にする手段として芸術を措定する否定神学的な美学が生じた。だが、そのような美学には、規範あるいは呪縛として抑圧的に働く危うさがあり、ホロコーストを「唯一無二」とする言説や、その記憶の特権化・絶対化に資するという面もあった。この美学が徹底的に政治利用された帰結のひとつに、現在、我々がパレスチナで目にしている暴力の正当化があるとも言える。

このワークショップの目的は、この「表象不可能性」というパラダイムを批判的に相対化し、文学以外のジャンルやメディアによる表象も視野にいれることで、証言文学をめぐる言説を外側に開くことにある。ホロコーストを特権化することも矮小化することもなく、それ以外の国家的暴力や政治的圧力、さらには、わたしたちの日常におけるさまざまな差別や不正義と「地続き」のものとして再考するために、いかに証言文学を読み直すことができるだろうか。

久保は、証言文学研究の近年の動向を、現代文学における「事実の文学」の再評価、歴史学の動向と文学の関係、カトリーヌ・コキオに代表される比較文学的アプローチの文学研究という観点から整理する。これらを通じて「表象不可能性」の美学を批判的に検討したい。

谷口は、「表象不可能性」の呪縛が、どのような多様な実践によってずらされ、解体され、乗り越えられてきたのかを、ルワンダ虐殺を生きのびたベアタ・ウムビエイ・メレス『移送』（2024)、カンボジアの映画監督リティ・パニュによる『消えた画』(2013)、そして二人の先駆者としてのシャルロット・デルボ『アウシュヴィッツ、そして、それから』四部作の実践等を通して例示したい。

このワークショップは、登壇者の二人が着手した研究プロジェクトの出発点に位置づけられる。それゆえ登壇者の報告は論点整理や問題提起を中心とし、会場の参加者との意見交換を重視するつもりである。「ジェノサイド」や「戦争」という語が現在進行形で我々に問いを投げかけてくる中、それでも文学に可能な挑戦や「声」の力について、みなさんと共に考えたい。

フランス語教育を支える検定事業――フランス語教育振興事業からのアピール

寺田寅彦（東京大学、コーディネーター）
倉方健作（九州大学）
深井陽介（東北大学）

フランス語教育は日本フランス語フランス文学会の活動の一つであり、それはスタージュで学会員にフランス語教授法および教育技能についての基礎知識習得の機会を提供していることからも理解される。質の高いフランス語教育を実現することで、フランス語学・文学そしてフランス文化のより良い理解が可能となり、学会がより高いレベルで活動を行えるようになる。

しかし、第二外国語教育の重要性が日本の教育制度の中で顧みられない状況が続き、フランス語教育の低迷とともにフランス語学・フランス文学をはじめとするさまざまな学術活動は危機に直面している。1981 年に創設されたフランス語検定を通じてフランス語教育振興事業を担ってきた APEF（公益財団法人フランス語教育振興協会）も例外ではない。受験者数の低下への対策と、フランス語教育の重要性をアピールしていかなくてはならない。

本ワークショップでは、フランス語検定の概況と変遷をたどり、その現在の運営や問題の傾向を知ることで、「知っているようで知らない」フランス語教育振興の意義と重要性のより深い理解を目指す。APEF が現在行っているフランス語教育振興事業を分析し、現在のフランス語検定の内容、実際の教育における活用方法を具体的に紹介することで、これからのフランス語教育振興事業をより高い視座から検討する。フランス語を用いることが前提となっている日本フランス語フランス文学会の活発な活動にとって、フランス語教育の振興事業が欠かせないものであることを本ワークショップを通じてあらためてアピールしたい。

パスカル研究の現在――『パスカル読本』刊行を記念して

山上 浩嗣（大阪大学、コーディネーター）
久保田 静香（日本女子大学）
鈴木 真太朗（盛岡大学）
川上 紘史（奈良女子大学）

このほど、ブレーズ・パスカル（1623-1662）生誕４００周年を記念に企画された『パスカル読本』が刊行された（山上浩嗣・望月ゆか・武田裕紀編、法政大学出版局、2026 年 2 月）。科学者、数学者、神学者、パンフレ作者、護教論者という多様な顔をもつパスカルの全体像を見渡すとともに、多様な論点に関する最前線の研究成果を収めた一般書である。本ワークショップは、２９名を数える執筆者のなかの４名が登壇し、本書の内容の一部とその発展的な考察を披露した上で、参加者との対話を通じて今後の研究の方向性の探求へとつなげることを目的としている。各発表の仮題と概要は下記の通りである。多くの会員の参加を願う。

・久保田静香：「ポール・ロワイヤルの教育書？――『文法』／『論理学』／パスカル」
姉妹編としてのポール・ロワイヤルの『文法』と『論理学』の成立過程でパスカルが果たした役割を文献学的に検証することで、「教育書」の枠に収まり切らない二書の諸側面に光を当てる。

・鈴木真太朗：「脱線、あるいは心を温めること――パスカルのめざした説得のあり方」
『パンセ』においてパスカルは、読者を「温める」ことによって慈愛を垣間見させようとする。本発表は彼がこれをいかに達成しようとしたのかを、「脱線」という概念を手がかりに考察する。

・川上紘史：「「見ること」による認識――パスカルとニコルを比較して」
認識様態を示すメタファーとしての「見ること」voir、「視覚」vue の用例をパスカルとピエール・ニコルにおいて比較・検討することで、両者の認識論の特徴の一端を明らかにすることを試みる。

・山上浩嗣：「「モンテーニュの混乱について」（『パンセ』S644）――パスカルとモンテーニュの文体と修辞の思想」
パスカルはモンテーニュの考えに反発しながらも、そこから多大な影響を受けている。その複雑な継承のあり方の一例を、二人の文体と修辞をめぐる思想の比較によって示す。

語圏横断的なカノン研究に向けて——フランスと周辺国におけるカノンの形成と再編

野田農（早稲田大学、コーディネーター）
石川大智（慶應義塾大学）
霜田洋祐（京都大学）
西尾宇広（慶應義塾大学）

本ワークショップは、国民文学と国民国家の成立という西洋の美的・政治的近代化を規定した本質的な構成要素としての「カノン canon」の実態に、主に英仏独伊の共同研究を通じて光を当てるものである。ここでは「カノン」という術語を「ある社会や文化がその伝承に関心を向けるテクストの総体」（Winko 2002）という意味の分析概念として用いるが、カノンとは、ある共同体においてその成員が常に参照を促される共通の尺度の謂いであり、近代社会における政治的・道徳的・美学的な価値規範を歴史的に査定する上ですぐれて有効な参照項にほかならない。また、国家統一運動期（19 世紀）のイタリアでも、フィレンツェ俗語で書かれた中世詩人ダンテの作品が国語形成の動きと結びつき、数ある傑作の一つから第一の正典へと格上げされたことは、その端的な一例といえるだろう。

もっとも、近代国家における文学カノンの探究にはその性質上大きな困難がつきまとう。各国語を基盤とした近代のカノンは本来的に国民的な性格を強く帯びていた一方で、実際のカノン形成に際しては外国文学が参照されることも珍しくなく、そこには複数言語圏を横断する高度に複雑な力学が作用していたからである。例えば 19 世紀フランスのスタンダールは、17 世紀のラシーヌと英国のシェイクスピアを比較しながら、自国を代表する古典主義作家ではなく隣国の詩人を一種の正典と捉え、そこに先駆的な近代性を見出している。このようなカノンをめぐる語圏横断的な力学を精緻に解明することで、しばしばナショナリズムの時代として総括される 19 世紀以来の西洋近代を、多孔的な国際的文化交流の時空として捉え直す展望が開かれるのではないだろうか。

こうした語圏横断的なカノン研究に向けて、先述の 4 カ国だけでなく、ロシアやラテンアメリカまで含む西洋各語圏におけるカノンの形成と再編に関する科研費助成事業基盤研究（B）「西洋近代文学におけるカノンの形成と再編に関する語圏横断的視座からの総合的研究」が本年度より始動した。本ワークショップでは、このより広範かつ大規模な共同研究の手始めとして、とりわけフランスの事例をひとつの焦点に設定しつつ、西洋近代に文学的なカノンがいかに波及し、あるいは翻って受容されたかについて、各語圏の最新の研究動向と特殊な歴史的脈絡の双方を視野に収めながら考察することをめざす。具体的な構成としては、まず野田が、フランスにおける 19 世紀の国民文学形成と再編成の過程を辿り直しつつ、19 世紀前半の作家（ユゴーやスタンダール）がシェイクスピアの先駆的近代性に着目して自らの理論を定立した経緯と、さらにそれが世紀後半の自然主義へと批判的に継承されていく過程を概観する。その後、石川、霜田、西尾がそれぞれ英・伊・独語圏におけるカノンの形成と再編を、フランスの事例を共通の参照軸としながら展望することで、フランス文学を専門とする学会員との建設的な討論のための基盤としたい。